

## 筑波大附属附属小学校研究会に参加して

### ～子どもに徹底的に考えさせる～

北斗市立大野小学校

教諭 佐々木 朗

日時 平成 20 年 2 月 14 日(木)15 日(金)

場所 筑波大附属小学校

東京都文京区大塚 3-29-1

研究会名 学習公開・初等教育研修会

の真夜中に無事到着。それでもぐっすり眠り、朝は開門の 30 分前に現地に到着しました。以前行った先生から、「マスクは必需品だよ。」と言われ、しっかりしていきました。

#### 0 筑波大の研究会

「日本一頭のいい小学生」、「人でごった返すほどの先生が集まる」、「すごい授業が行われる」そんな話を聞いて、いつか、自分も機会があったら行ってみたいという思いがありました。ただ、噂の「すごい」だけではなく、先進の教育技術を学びたいという思いで参加させていただきました。

筑波大附属というと、茨城県？と思ってしまうのであるが、実は、東京のど真ん中にある小学校です。



飛行機が欠航で、JRに変更し、その日

#### 1 研修 1 日め



地下鉄を降りて、地図で調べた通り進むと、もう、大行列になっているではありませんか。

そのそばを制服姿の子どもたちが、制服すがたで、「おはようございます。」とさわやかに挨拶をしながら、並んでいる先生の横をすり抜けて学校に入っていきます。

受付はマークシートに記入。それを受け付けに渡し、参加費 4000 円を払い、紀要をもらい、中へ入ります。参加者は赤いリボンをつける約束になっています。

授業は撮影禁止ということでしたので、混雑の様子は映像ではお伝えすることは

きませんでした。たまたま元同僚だったこの研究会常連の先生が案内してくれたこともあって、一日目は講堂で、評判のある授業を見ることにしました。

私たちはそれでも早めだったので、比較的前の椅子席を取ることができました。まだ、授業までは一時間以上あります。授業時刻が近くなって振り向くと、満席+通路にも人が入っています。当然ずっと後ろは立ち見の状態。六年生の国語「書評を書く」の授業を見ました。

続いての授業は、3年生の国語「百万回生きたねこ。」提案授業ということで、授業数が少なかったこともあり、さらに、人の数は増えて、2000人位。イメージとしては、かなでーの小ホールぐらいの広さの講堂で、授業はステージ上で、先生はマイクを使っての授業。子どもの発言も全てマイク片手です。客席はもちろん満席。通路も、ステージ前のちょっとしたスペースも両袖もひとが入れそうなところには、全て人。通路もこれ以上は入れない位の人。座っている人はトイレにも行けるような状況ではなく、一度席を立ったら二度と戻れないような状況です。授業は、後述しますが、感動そのものでした。

お昼は弁当を頼んでいたのですが、中庭で引きかえました。当然ながら、白いものはありません。ジャンパーもいりません。中庭のお日様が出ているところの階段の下に座って、ポカポカだなあと思いながらの昼食でした。

午後からは幾分人数が減りましたが、びっしりの講堂で授業のあり方や、今後の国語教育の方向性などの話を聞きました。

## 2. 研修2日目

二日目は、やはり「一年生を見よう。」ということで、教室で授業を見ました。二日目は単独行動だったので、いざ一年生教室へと下調べをしていたのですが、迷ってしまいました。案内の児童がいたので、会場を尋ねたところ、丁寧に私を連れて、ごった返す階段の流れに逆らって降りて、会場前まで連れて行ってくれました。実に丁寧な対応でした。

この小学校は、特別に新しいわけでもなく、教室に特別な設備があるわけでもなく、ごく一般的な教室。普通の教室とどこが違うかと言えば、廊下側が全てガラス窓になっているということ。当日は全ての教室の前後のドアが外され、またガラス窓も外されていました。この日も行列はすでにできていましたが、まあまあ早めに行ったので、比較的前の所に場所を確保できました。確保と言っても、もちろん立ち見です。そこでまたじっと一時間半待ち。それまでの時間、授業をする先生は、たぶんいつものように、宿題のマルつけ、子どもは、友達とおしゃべりをしている子あり、あやとりをしている子あり、じっくり読書をしている子ありと様々です。開始時刻が近付くと、子どもも先生もよく見えないだろう廊下までびっしりの状態。教室は身動きのできない状態。開始少し前になると、全員で詩の暗唱をしました。子どもたちはかなりの数の詩を暗唱しているようです。それでも時間があり過ぎて、子どもも先生も、「時間まで何しよう」状態のようで、先生は「少し早いけどフライングするか。」と10分ほど早く本番がスタートしました。そうしたら放送で、「遅れて来る先生が多いので、来

られる先生が多いので授業を10分繰り下げます。」というアナウンス。その後会場案内のアナウンスが長々と流れ手授業は中断。先生は、早く始めたバチがあたったかなあ。」と苦笑いしながらも余裕の表情です。一年生の国語「まめ」という説明文の教材でした。

二本目の提案授業は、小学校近くの会館を会場にした小学校英語の授業を見ました。ぐんまアカデミーという教育特区の学校の先生が筑波の子に飛び込みで英語の授業をするというものです。教育特区は学習指導要領にしばられない学習指導ができて、国語と社会以外はすべて英語で授業を行うという学校です。その先生が初めて会う子どもたちに英語の授業をしたというわけです。

午後からは、先ほどの授業の反省を少し聞いて、そのあとすぐ中学校の英語の導入の再現の授業公開がありました。小学校の先生は中学校で英語をどのように導入しているかなかなか見る機会がないであろうということで、筑波の中1に来てもらって、一年間の英語学習のダイジェスト版の授業をしてもらいました。

その後に、小学校英語のあり方の協議会だったのですが、飛行機の時刻もあって、少し余裕を持って会場を後にしました。

### 3 授業の内容

#### (1) 6年の国語

単元名「書評を書こう ～ショートショート作品の作品構造を探って」

阿刀田高氏の「果たせない約束」という作品をその場で渡され、子どもたちは、ノートにその構造を図式化します。ただし、結末の部分はカットされていて、わからない

状態です。



上図は別授業のものですが、10分ほどで、子どもたちは図式化し、話の結末を予想します。この後、子どもたちは、話から得られる手がかり、結末の予想、その伏線などを話し合っていきます。先生は、ある程度の方向性に導いていきますが、子どもの発言を徹底的に聞いていきます。子どもたちは、人の意見を聞き、自分の意見との違い、関連などを発表していきます。

#### 感想

子どもたちのしゃべりはすごい。たくさんの人に見られているという感覚など全く気にしないように、ほとんどの子が手をあげ、マイクを持って堂々と自分の意見を発表しています。それも、発言の言葉がきちっとしているし、筋もしっかり通っています。でも子どもらしいのが、発言の後に、「～じゃん。」っていうところ。

私はこの授業で書いて整理するということが、そして、教師が徹底的に子どもの意見を述べさせること、また、発表したいという気持ちがわくような問いかけをすることなどを学びました。

#### (2) 3年の国語

「百万回生きたねこ」

復習として、今まで猫がどんな6つの人生について振り返り、自分たちで他の人生を

創造して、それを語るというところから始まった。「語る」というだけあって、ノートに書いたものを読むのではない。すべて頭の中に入っている。しかも、暗唱ではない。「語り」なのである。声の大きさ、強弱、間、目の位置、全て計算しつくされているかと思うほど、会場に発表した子の気持ちが伝わってくる。「これが3年生？」という正直な感想である。

次の発問が、どうして、百万回も生き返ったのに、白いねことであった時に生き返らなかったのだろうか。」ということであった。この発問に対して、教師はすぐに発表させずに、「対話」をさせた。隣の子と、自分の意見を交換し、徹底的に討論させたのである。その後、子どもたちは、「愛し合っていたから。」「天国で一緒に暮らしているから」など様々な角度からの意見が出た。

もう一つこの授業には山があった。それは、「語り」であった。3月に語りの発表会があるということで、今回の授業もその一環ということであった。子どもたちはステージから身動きのできないほど混み合った会場に降り、様々な方向に散って、それぞれの場で、付近にいた先生方を相手に、白いねこと出会った件を語った。私も比較的前の方にいたので、その声はよく聞こえた。決して早口ではなく、聞いている人すべてに目を合わせながら、十分な間を取って語りかけてくれるその姿にただただ感動しました。「聞いて下さり、ありがとうございました。」と深々と頭を下げる子どもたちに、会場のあちらこちらで、拍手が起こりました。会場に降りた子どもたちがステージに戻ってから、最後に一人の女の子がステージの中央に立ちました。2000人以上の

先生方の前で「語り」をしたのです。これだけの人数が入れば、先生方と言えども少々ざわざわすることもあるでしょう。ところが、彼女が語りを始めた瞬間から、すべてが静まりました。物音一つ聞こえない静寂さです。「ねこは もう、けっして 生きかえりませんでした。」その静寂さが、割れんばかりの大きな拍手に変わりました。

授業の反省で先生がおっしゃっていましたが、「失礼な言い方かもしれないけれど、今日は先生方を使わせてもらいました。こんな大勢の先生方の前で『語り』をすることは、子どもたちにはとってもいい機会だったと思います。すごい自信がついたと思います。そういう意味で、聞いて下さった先生方にはとても感謝しています。」と。

#### 感想

この授業も「考えさせること」、「そして子どもの意見を徹底して引き出す」ということを学びました。自分の意見をなかなかみんなの前で発表するのは辛いという子ども、隣の人との話し合い(ここでは「対話」と呼んでいます)をして、自分の考えを発表し、人に伝えること、そして人の意見を聞くことで、自分の意見を確かなものにして、それを全体に発表していくなどの技術を学びました。

また、授業後の研究協議で、参加者からの「どのような順番で指名しているのですか。」という質問に対して、先生は、ちょっと考えて「目力(めじから)です。」と答えました。手を挙げている子の目をみて、どれだけ教師に「僕に(私に)当てて」という力がこもっているかで決めることが多いとのこと。これだけ目で訴えながら子ども発言を求めるとすごいことだなあと

思いました。

そして、今でもジーンときている語りの部分。あの女の子の表情の声の一つ一つが今でも脳裏に熱く焼き付いています。ただ、何回も練習したのではなく、あれだけの表現力はどれだけ、深く作品を読み込んでいたかを示すものでもありました。文学作品への取り組み、内容への迫り方など多くのことを学ぶことができました。

### (3) 1年生の国語の授業

「まめ」という11段落に分かれている説明文の中間部分が順不動になっているプリントが配られ、子どもたちはそれを上手に読んでいきます。読むのはとても上手です。でも、順番がおかしいのにはちょっと気付かないようです。「先生が何かおかしくない？」って尋ねると、ぼそぼそと声があがり始め、しだいに授業が盛り上がっていきましました。どの段落とどの段落がおかしいのか、子どもたちはプリントやノートに自分の考える正しい段落の番号をまとめ始めました。そして、隣近所の子どもたちと相談です。次に全体発表です。一年生では全員が皆手を挙げるという状態ではありませんでしたが、それでもほとんどの子が一時間の中に一度は発表しました。なんとなくみたい意見もありましたが、「この文のこと言葉があるから、これとこれは逆になっています。」などという理路整然とした発表がとても多かったのが特徴です。書き出しと結論のそれぞれの一文を逆にしたらいいと最後までがんばっていた子がいましたが、子どもたちが、理由を持ってそれが違うということを述べると、その子も最後には納得してすっきりしていました。

合計20分早く始まった授業も、ほぼ定刻に終わりました。



### 感想

最初教室に着いた時は、半分ぐらいの児童しか登校していませんでした。次々に「すみませーん。」と人波を押し分けながら登校してくる子どもたち。「一度トイレに行っておいで。」と教室外へ出る子どもたちもこれまたたいへんでした。子どもたちを見ると、普通の一年生。ただ、ポツーンと何もしていない子はいませんでした。人目もくれず、活字ばかりらしき本を読んでいる子も何人かいました。

授業では、子どものつぶやきを大切に先生は子どもの意見を発表させていました。ただ、つぶやきをそのまま受け取るのではなく、きちんとした形で発表させる。また、周りで聞く人は、きちんと発表者の方を向いて発表するという事は、かなり徹底されていました。

子どもたちの発表を聞いて、「前に勉強した説明文の授業ではこうだったから、私は、この文でもこう思います。」とか、「あさがおを育てた時、土が盛り上がり、葉が出て、茎がでて花が咲いたから、豆も同じように成長するんだと思います。」などと既習事項を振り返りながら、発表している

ところは、きちんと習ったことが力になっているなあとつくづく感じました。

授業モードに入った子どもたちは、それまでと違った表情、そしてさすがと言えるような発表態度、発表内容でした。

#### (4) 5年生の小学校英語

単元名「英語のできる家庭科 ～How to make Japanese Pancake」

会場の20名位の5年生の子どもたちが「日本人と留学生に扮したグループに分かれて、お好み焼きの作り方を留学生に英語で教える」というロールプレーをする授業であった。

最初に子どもたちを前に先生がペラペラペラペラと英語でしゃべりまくった。その後、作り方の説明の仕方を英語でどのようなかのレッスンを受けて、最後に実際にお好み焼きを作るというのが授業であった。

#### 感想

前述の通り、普段英語で各教科を教えている英語ペラペラの先生が、初めて会う筑波の子にどれだけ、英語を理解することができるか、というあたりに興味がありました。一応昔英語の先生であった私は、お恥ずかしいところ、半分ぐらいは聞き取れたかなって言う程度でした。大方の先生は、頭のいい子たちだから、そこそこ英語でやりとりするんだろうなと思って見ていたところが、最初の英語のシャワーで、子どもたちの目は点になっていた。「Any question?」と言われても、何を質問していいのかさえ、わからない状態になって、その期待外れさに、なぜかちょっと安心してしまった。どうしようもないので、その先生は、日本語を混ぜはじめて、授業を進め

ていった。賢い子どもたちではあるので、「キャベージ、ミックス ウイズ フラワー」「ミックス フィフティーン」などと慣れない英語を使いながら、必死に授業に取り組んでいました。でも説明の部分が終わって一安心したのか、ホットプレートに火が入る頃には誰も英語を話す子はいませんでした。

後で、筑波の先生が説明して下さったのには、「意外かもしれませんが、この子どもたち、塾に行っている子はあんまりいないんです。まして、うちの学校では英語はむしろ『必要ないんじゃない。』」みたいなところがあって、あまり力を入れていなかったんです。」とあって、ホント意外だったと思いました。

折しもその日、学習指導要領案が報道発表され、小学校5、6年生に週1回の英語活動が入ることがほぼ決まりになりました。ある調査によると小学校の保護者が小学校での英語導入に対しては、7、8割が賛成との意見であるのに対し、現場教員では、小学校の英語活動に賛成は3割程度と消極さが垣間みえました。

研修会でも、授業をやっていく自信がないという意見が大多数でした。ある音楽の先生が、「『先生は、ピアノが弾けるからいいねえ。』とよく言われるけど、英語も同じようなものかもしれません。『先生は、英語話せるからいいよねえ。』って。でも、先生方はピアノが得でなくてもちゃんと音楽の授業をやっていらっしゃる。英語についても、英語がペラペラしゃべることができなくても、やえる英語の授業っていうのもあるのではないのでしょうか。」と。その言葉を聞いて、安心したような気がしました。

冬休みに行った研修会で先進校の話を聞きました。多くの先生が苦労しながらも、きちんとカリキュラムの遂行に努めていました。しかし、残念ながら、最後まで逃げて、何もしなかった学級もあるとのことでした。

英語力をつけるという研修はやはり必要でありましょう。しかし、それ以上に英語が流暢でなくっても、指導はできるという「指導力」を身につけようと思うことは大切であると思います。

私も、中学校で英語を教えていた英語教員の端っくれ。これからもいろんな研修会に参加して、どんなカリキュラムがいいのか、どんな指導法があるのかの情報提供をがんばっていききたいなあと思いました。

#### (4) 中学校の英語の導入授業

小学校の先生が多く、中学校での英語導入はどうなっているのか、という疑問をに答えるため、中学校1年生の子どもたちを連れてきて、中学校の英語の先生が、初めての英語の授業から、一年を終わろうとしている現在までの流れをダイジェスト版ということで、授業を見せてくれました。

4月、5月は、基本的なあいさつやアルファベット。子どもたちが初めて単語を書いたのは5月28日だそうです。

発音にはかなり力が入っていることを感じました。各自がテープレコーダーを持ち、自分の発音を録音し、ネイティブの先生に評価してもらう。鏡を見て、自分の舌の位置を確認するなど、その辺は徹底しています。

授業の終わりに「What am I?」というゲームを見せてくれました。出題者が、ある

物、今回は「なすび」をイメージして、子どもたちは、それを当てるため、英語で質問します。「Can you eat it?」、「What's its color?」などが出る質問に答えて、最後にもう一度「What am I?」コールで全員一緒に答を言います。その発音がとても滑らかで、反応も英語で盛り上がるっていう感じでした。

#### 感想

授業後の反省会で、授業者の先生がおっしゃっていました。中学校では「自立した学習者を育てる」のだと。勉強させられているのではなく、自分で必要性を感じて、自ら積極的に学ぶということです。そして、自動車の4つの車輪に例え、大きな前輪は、授業と家庭学習。授業だけでは、絶対に英語はものにならないと断言しています。これもピアノの練習に例えていました。ピアノの先生にみてもらう時間は週に2回、それぞれ30分程度だとしても、それに向けて練習する時間はその何倍ものに時間になる。英語も全く同じ理屈であるということ。そして、あとの二つの車輪は基礎英語と、最後は自分で立てた学習者としての英語に対する目標とのこと。ラジオの基礎英語をがっちり聞くよう学校として指導していました。

私も恵山で8年英語教員をしていました。私も、英語は、予習・復習などの家庭での学習は必須と感じ、子どもたちに勧めてきました。中学校一年生の初期の段階の習慣づけが大切と、生徒・保護者にも訴えました。一学期は英語の基礎の基礎ですから、中間試験、期末試験はほぼ全員が8割の及第点をクリアです。ところが、二学期になると、家庭での学習の週間を付けきれない

子がだんだんとドロップアウトしていく悲しい現実がありました。家庭学習をしないというのは、小学校からの積み重ねで、英語だけのものではありませんから、その習慣を形成するのはとても難しいという現実にぶつかりました。

だからこそ、今小学校一年生を受け持つで、「勉強は楽しい。」「やってくれば先生がほめてくれる。」と思っている間に、そして、おうちでもお父さんお母さんがめんどろをみしてくれるこの時期に、しっかりと家でも勉強する週間をつけるよう、訴えています。

#### 4 最後に

本を読むことも勉強。でも実際自分の目で、足で稼いだことってというのは、確実に自分を肥やすことになったなあと思います。今回紹介できなかったいろんなことを私は肌で感じてきました。

すぐできる実践。そして、指導の根底にある教師の授業に対する心構え、など多くのことを学んできました。

今回の貴重な時間を与えて下さった先生方に感謝するとともに、自分の「教師力」を向上させるべく、これからも研修を大切にしていきたい決意であります。



帰りは天気を心配することもなく、平和に戻ってくることができました。